ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌

Takefree!

なび

8月号
vol. 126

フェイスブック、はじめました。
「WEBなび」で検索or下記QRコードをチェック！

特集

西成あり ゆえに大阪あり

「商店街に夏到着」
花園南1丁目付近にて撮影

特集

お成あり ゆえに大阪あり

5 夢を抱く若者のすがたは素敵

エリオットは名古屋に発った。彼は、わたしたちとは異なるまなざしで西成を捉えてきた。おかげでわたしたちの知らない西成のもう一つの「顔」を教えてくれた。その置き土産を拾い上げ、わたしたちの知らない西成を追跡してみよう。まだ見ぬお隣さんの顔を覗くのは、ちょっとドキドキするけれど。

つまらない予断

取材する場合、たいていは問題意識を設定し、「こんな話が聴けるのではないか」と想定してしまうものである。それは取材のエチケットでもあるが、予断をくだしているという半面ももつ。今回も「海外から来て慣れない日本社会で困っていることもあるのでは?」「マスコミで報道されているような厳しい現実に直面しているのではないか?」などと想定していた。しかし、結論から言うと、わたしたちが出会った人びとはとても快適に日本での日常を暮らしていた。今回お話をうかがったのは、お隣の国際日語教育学院(以下「日語学院」と表記)に通う3名の学生。前回のモディさんと同じく、日本語を学び日本の大学でそれぞれのステップを踏み出そうとしている若者である。その姿は、筆者らの安易な想定を軽やかに飛び越えるような爽快さを湛えていたように思う。

和やかな雰囲気で取材

レ・ヴィエット・フンさんはベトナムのタインホア省の出身。日本のインターネット系の技術やアニメに関心をもち、昨年4月に日本にやってきた。彼は、兄と友人(ベトナムの日本語学校からの付き合い)の3人で家事を分担(兄は洗い物、友人は料理、フンさんは掃除を担当)しながら共同生活を送っている。学生の多くはアルバイトで生活費を稼いでおり、フンさんはバイト先を自分で探してきて、天王寺の中華料理店で働いている。忙しいながらも楽しい仕事場だが、ときどき高齢のお客さんが厳しいクレームをつけてくるのだそうだ。

中国江蘇省出身の李開恩(リカイオン)さんは昨年7月に日本へやってきた。日本に来たばかりの頃に不思議に思ったのは、人も優しいし環境も良いが、公衆トイレが少ないこと。そういえばたしかに公衆トイレは昔と比べて少なくなった気がする。日本だとコンビニで借りようとするのだが、日本に来たばかりの頃、公衆トイレが見当たらないので、開恩さんは近くの鉄道駅で180円を払って改札を通り、トイレを借りたのだそうだ。それ以来、出かける前にトイレに行くように心がけている。ちなみに中国では公衆トイレは街中ふんだんに設置されているそうだ。

孟帥奇(モウスイキ)さんは昨年10月に中国遼寧省からやってきた。彼女はもともと日本の文化、とくに日本の人情や生活に興味をもっていた。日本の生活を楽しみにやってきたが、その期待どおり、毎日を楽しみながら日本での学生生活を送っている。

日本の生活に興味をもったきっかけを尋ねてみると、『あたしンち』という日本のアニメが大好きだという答えが返ってきた。『サザエさん』のようなファミリー向け

地図で故郷を確認

のこのアニメを、帥奇さんは時間があったら毎日観ているのだという。主人公の性格がお母さんに似ていて「わたしはひとりっ子で、両親と別れて、こんなに遠いところに来て、とても両親に会いたいから、このアニメを観たら心が慰められる」。

よく学び、よく働き

関心や事情は三者三様だが、日本に興味をもち留学を決心した学生という立場による共通点も見受けられた。

①日本に来る前から本国ですでに日本語を学んできている。かれらは日本に興味・関心を持って来日しているので、十分な準備を整えてやってきている。その周到な準備は来日後のかれらの生活も支えているようである。

②日本での生活を支えるネットワークの存在が来日に伴うハードルを軽減させているように思われる。フンさんは兄と友人と同居しているし、開恩さんは現在住んでいる物件を探す際に、中国系の不動産仲介業者を利用している。

③それぞれの関心は異なるものの日本の大学への編入入学を志望している。フンさんは情報システムを、開恩さんは経営学、帥奇さんは日本文化を学ぶため、目下、日本語の学習と並行して大学受験の勉強に励んでいる。

④アルバイトで日々の生活を賄っている。アルバイト先はかれら留学生にとっては日本人や日本社会と接触する絶好の機会でもある。また、その一方でさまざまな摩擦や軋轢が生じる機会でもある。そのあたりはどうなっているのだろうか。

帥奇さんは、近くのスーパーでレジ打ちの仕事をしている。同僚の国籍はいくぶん多様化しているようだ。自分たち中国人のほかにネパール人や韓国人もいる。中国人は自分の他にもう一人の女性がいる。仕事は日本人のマネージャーが教えてくれる。レジを打つだけだとそんなに難しい会話は必要ないが、あの場に立っていると、レジ以外のこと、たとえば商品説明や割引サービスなども知っていなくてはいけない。お客さんから尋ねられることもあるが、よくわからないときは日本人に聞いて助けてもらっている。

李開恩さん

フンさんもまた日本のお客さんと接触する機会を多くもつ中華料理店が職場だ。なかには厳しい態度でクレームをつけてくる者もいて辟易とするようだが、職場の上司や同僚に対する不満を聞くことはなかった。その点は開恩さんについても同じだった。開恩さんは、通天閣の下にある串カツ店で夕方から揚げ場の仕事をしている。バイトには自分の他にも中国人がおり、揚げ場を担当していることが多い。それに対して日本人のアルバイトは接客を担当している。

マスコミでも報道されているような悪い雇用条件での労働を経験していたり、見聞きしていたりすることはあるのだろうか。開恩さんは、働き方についても日本のルールを事前に勉強してきており、日本での働き方は了解済みで、とくに疑問や不満があるわけではない、という。また帥奇さんの職場では店長が在留カードを確認しつつ、きちんとルールに則った指示をしているそうである。

⑤大学卒業後も少なくとも数年は日本での就労を思い描いている。9ヵ月から1年の日本での暮らしのなかで、かれらは自分たちの夢を実現すべく充実した日々を送っている。当初に思い描いていたイメージとのギャップを感じることもあまりなく、日本そして西成での生活の楽しさを伝える担い手になってくれるかもしれない。筆者らはできるだけそうなってもらいたいと思う。ならば、わたしたちはどのような関わりを持てばよいのか。そのことをかれらに直接聞いてみた。

交流のタネ

日語学院には中国やベトナムをはじめよその国からの学生が集まってくる。他国の人と話すときには日本語を使うのだが、そこで交わされる日本語を日本人が聞いてもきっとわからないだろう、という。同じ境遇にある者ならではの「日本語あるある」みたいなものがあるのだろうか。とても興味深い。

同じ学校に通っていても親しい友人は2人ぐらいと思いのほか少ない。また、日本人の友だちもそれほど多くはないようである。帥奇さんはなかなか友だちを作る機会に恵まれないと言う。自分たちの部屋で友だちと集まっても部屋が狭い。そこで、「ゆ～とあい」のキッチンを使って日語学院の交流パーティーを開けば人は集まるだろうか、と尋ねてみた。すると、「たぶんいっぱいいる」との答えがかえってきた。隣人との交流のタネはまずはこういったところにあるのかもしれない。

レ・ヴィエット・フンさん

日本の友だちがたくさんできれば、日本語を話すいい機会にもなるはず。日語学院に限ったことではないが、日本語学校では標準語を教えなければならない。留学生であるかれらは教室では標準語を学び、アルバイト先で大阪弁を使う日本人と出会う。「勉強したことと(日本人が)話すことが全然違う。方言があるんです」。たしかに、アルバイト先での限られた会話では、生活に根づいた日本語＝方言に習熟することは難しいだろう。「きっと方言がわかれば、標準語もすぐわかると思う」。こうしたニーズに対しては前号で言及した「西成識字よみかき・日本語教室」が応えてくれるかもしれない。金さんもモディさんもマンツーマンで生活に根づいた日本語が学べる点を評価されていた。

わたしたちはつい、日常生活の一コマから社会問題の芽を探し出し、「その解決策は何?」と頭でっかちに考えてしまう。今回の特集もそうした問題意識から始まったのだが、今のところその予断は不発におわっている。ならば、目の前にいる隣人たちとの交流の場をつくっていくことが、わたしたちの喫緊の課題ということになろう。もちろん、困難に直面している隣人の存在を忘れてはならないけれど。

孟帥奇さん

文責:若松 司

地域こども

虎将団（おうえんだん）

第３回

子育てに取り組む人・団体・施設を紹介して、子どもを支えるネットワークをどんどん広げていきます！

長橋のこどもみこし、長小でスタンバイ

長橋を練り歩くで！「長橋こどもみこし」

夏の訪れを告げる地域の行事　きっかけは17年前

夏には盆踊り、地蔵盆などお祭り事が沢山ありますが、今回は地域の子どもたちが主役の御神輿を紹介します。西成区北西部のこどもみこしは、松之宮、長橋、北津守の各町会が主体で実施されています。今回は長年に亘って「長橋夏祭りこどもみこし」の中心を担っておられる長橋主任児童委員の矢田幸之助さんにお話を伺いました。

矢田さんは、17年前にご自身の子どもが長橋小学校に入学した時にＰＴＡ役員になられました。それをきっかけにこどもみこしにも関わるようになり、子どもが小学校を卒業した今でも世話役を続けておられます。以前は、近くの松之宮神社で行われるお祭りに合わせて実施していましたが、最近では子どもたちや手伝う大人が参加しやすいように、お祭りの前の土曜日に行っています。長橋こどもみこしの主な担ぎ手は長橋小学校の４～６年生です（１～３年生は保護者の同伴が必要）。例年は30人ぐらいの子どもに保護者や地域の方が参加して、長橋地域を大いに賑わせてくれます。

暑さと格闘！　練り歩き

今年も例年と同じく、こどもみこしが始まる２日前から長橋小学校で太鼓やカネの練習をしました。初めて参加する子どもたちは矢田さんに教えてもらいながら、お兄ちゃんお姉ちゃんの動作を見て、一生懸命覚えようと頑張っていました。

そして当日の７月15日は、天気にも恵まれ、約40人の小学生が参加。午後１時、長橋小学校に集合・スタンバイして、30分後に出発します。法被を着た子どもたちが元気に曳くみこし（を載せた台車）と、特訓を積んだ４人の子どもがカネと太鼓を打ち鳴らす台車を伴って、長蛇のみこし行列が長橋地域内を練り歩きました。

スタートしたばかりの時は元気いっぱいの子どもたちも、しだいに疲れが見え始め、長橋集会所で休憩。地域の大人から差し入れをもらうと、子どもたちもすぐに元気を取り戻しました。その後も長橋地域を練り歩き、「まちかどホームすずらん」の前まで来ると、毎年こどもみこしを楽しみにしているたくさんの入所者の方たちがお出迎えをしてくれました。

３時間かけて長橋の街を練り歩き、集会所に到着して終了。太鼓の演奏を終えた子どもたちはホッとした様子でした。長年に亘って行われている、こどもみこしの太鼓やカネの音が本格的な夏が来たことを教えてくれます。

レポート：寺嶋公典
沖田一志

[飯島照喜] あつい、暑い、熱い。外出する機会が多いものの、出ることをためらう、でも仕事で行かなければ、意識と行動のバトル戦だ、やはり休養は必要。今年は長～い夏休みを取るぞと心に誓った。

（上）長橋小学校で休憩（下）鳴り物を積む台車

元気に街の通りを練りあるき

[沖田一志] 今月、パケット契約の上限越えでスマホのネットが使えなくなりました。普段何気なく使っていたスマホの便利さや、手持無沙汰で無意識にスマホに触れていたことを再発見しました。

[佐々木敏明]
まどろみや四分五裂の熱帯夜

おもろいひとびと

地域にねむるヒト資源。その気で探すといるいるオモロイ人が。『なび』はオモロイ獲物をさがして今日も行く。隔月でおくる新シリーズの誕生！

アナログオタクの名嘉真稔（なかまみのる）さん
（「スターラジオ」店主）

昨年、藤田記念病院のまん前にあるこの店に入った。看板の表示もない。２間ほどあるガラス戸の店先からアンプやスピーカーが見え、アナログレコードも見えかくれする。不愛想な店主が一人いすに座っている。暗く細長い店内には足の踏み場もなく、雑然とラジカセやターンテーブルなどオーディオ機器類が山高く積まれているのだ。しかし、ＬＰやレコードの話題になると話が盛り上がり、その日名盤ともいえる交響曲やピアノ曲を発見、超格安で買えた。それでもこの店がどんな店なのか謎のままであった。

中古レコード店としては品数少なく、オーディオ機器販売にしては旧式ばかりの展示で、しかも部品のない不完全な商品もある。西成のこんな人通りの少ない場所にオーディオの中古販売店？

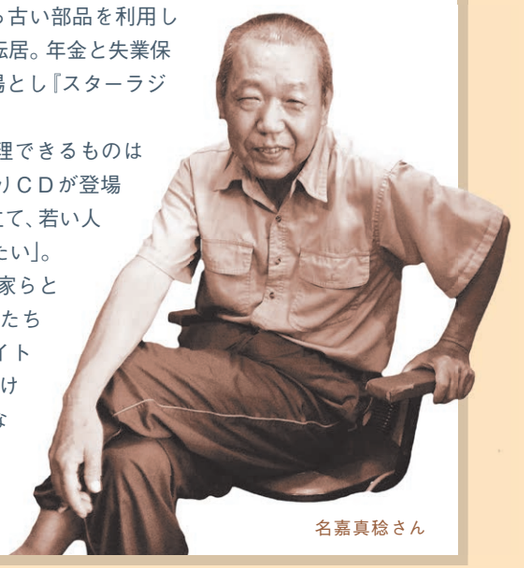
そんな不思議は何度か通ううちに霧消した。オーナーである沖縄県出身の名嘉真さん（64）は、若いころオーディオ機器にあこがれ来阪した。大型トラックのドライバーだった。住まいは八尾市内。憧れのオーディオの聖地日本橋へは徒歩にてデビュー。ワクワクドキドキで電気街を散策してラジカセを購入した。「この日は最高の日だった。今でも記憶に残っている」と嬉しそうに話すのだ。

何度かの転職と転居を繰り返し、会社の倒産や事故もあり50才後半で仕事をなくしてしまう。名嘉真さんは、昔から古い部品を利用してオーディオ製品を組立てていた。10数年前西成に転居。年金と失業保険を頼りに店舗を借りた。ここを名嘉真さんの仕事場とし『スターラジオ』と命名した。

「僕はアナログ修理のアマチュアだから経験上修理できるものはできる。しかしＩＣ部品は不可能。70～80年、つまりＣＤが登場するまでのアナログ家電なら修理が可能。修理や組立て、若い人やアナログに興味のある人たちにこの場所を提供したい」。

名嘉真さんは、ここをアナログ製品修理の場、愛好家らと談話できる役割の場と考えている。つまりそんな人たちが集まる居場所だったのだ。「収入は少ない。アルバイトと年金で、これからも趣味のアナログショップを続けたい。大切な場所だから」と話す。ＳＰ盤や流行歌などの話題に、いつも面倒くさそうな名嘉真さんの表情が、超幸福そうなアナログ顔になる。

レポート：佐々木敏明



名嘉真稔さん

[安田拓也] クーラーの代わりに２Ｌのペットボトルを凍らせて水枕にして寝る今日この頃。僕も水枕も朝起きると寝汗でぐったり。クーラーをつけずに快適に過ごせる良い方法はないかな。

[西田吉志] ８月４日（金）・５日（土）は毎年恒例の「盆踊り大会」です。両日とも午後７時から長橋３公園（西成区長橋３丁目７番）にて開催しています！ぜひ、みなさんもお越しください♪

ピースのつぶやき

読者のみなさまとは１年４ヵ月ぶりの再会です。お久しぶりです、ピースの母こと赤井まゆみです。99回目をつぶやいた後、しばしお休みをいただいておりましたが、ようやく最後のつぶやきを書く心持ちに至りました。

２０１６年８月４日、午後11時30分、病気治療中だったピースは永遠の眠りにつきました。犬年齢12歳と７ヵ月でした。このつぶやきがみなさまのお手元に届くころ、一周忌を迎えます。

みなさまには生前より本当にピースを可愛がっていただき、ありがとうございました。今回で本当にフィナーレになりますが、みなさまへの感謝の意をこめて１００回目をつぶやきたいと思います。

『心の糸電話』

ピース、今どうしてるの？
元気にしているよ。
身体はもう苦しくない？
うん、全然大丈夫。
ご飯はたべてる？
食べ過ぎておなか満腹。
眠れてるかな？
ぐっすり眠れるよ。
寂しくない？
う～ん。寂しくないよ。
お母さんは寂しいよ。
いつもそばにいるよ。
ピースに会いたいよ。
いつでも会えるよ。
ピースはどこにいるの？
お母さんの心にずっといるよ。
そうだね。
そうだよ。またいつでもお話しようね。ワンワン!!

赤井まゆみ

たくやの ろくじょうふたま 畳間

ハナレバナレになった人とまち。
くらしの窓から、紡ぐヒントを探してみる。

あんしん

今回は、前回と同じく〝ろじ〟をテーマに「安心」を考えてみる。

例えば、通りを結ぶ細なが～い路地や、行き止まりの路地があったとする。そんな路地の途中で、もし火事が起こったらどうしたものか。今の決まり（法律）では、どのまちでも新しく路地は作らないことになっている。道でも建物でも、片方がダメなら、もう一方から逃げられることや、消火活動ができる道幅が必要になっている。

でも直ぐには解消しないし、路地が無くなればせっかくのご近所関係も失われるのではと心配。なら、自分達で安心を守らなければならない。難しくはないはず。予防と共に、ご近所同士で「もしも」のことを考えておけばいい。火や煙に気付けば先ず「119番」。それから「ここが燃えたらあっちに逃げて、ここで集まろう。」とか、「この時間なら、○○さんは家にいるかもしれない。」とか、「あそこの奥さん、一人では逃げられないはず。」だったり、ご近所づきあいの大切さを感じる。

勇気を持って、お友達や町会長さんに声掛けするのはどうだろう。

（安田拓也）

[谷口円] 現在仕事で来年のカレンダーをデザインしているのですが、もう2018年の事をやり始めるとは、早い…。ぼんやりしてると、今年がいつのまにか終わってしまいそうです。

[田岡秀朋] 障害年金の不支給割合という記事を目にした。４人に１人が却下される０県と25人に１人のＴ県で６倍の差が。そういえば、大阪市の生活保護分析には「不支給割合」がなかったなぁ。

号外 マナビバ！通信

「まずは、おいでよ。」ゆ～とあいには中学を卒業してから進路を一緒に考える場所と時間があります。そんな“フリースペース マナビバ！”の徒然な日常をお伝えします。

マナビバは毎週火・木曜日の１０:００～１６:００、ゆ～とあい２階でオープンしています。
電話:06-6561-8801　Mail:info2@human-ref.jp

スモールステップ

マナビバの運営で大事にしていることの一つに「スモールステップ」があります。スモールステップとは、最初から高い目標を掲げるのではなく、細分化した小さな目標を達成する体験を積み重ねながら、最終目標に近づいていくこと。アメリカの心理学者Ｂ．スキナーが提唱した学習理論です。日本語に訳すと「小さな歩み」。大事なのは小さな一歩一歩を積み重ねていくこと、今いるところの一歩先を見て、少しずつ進んでいこう、という考え方です。ビルの10階にいきなり、ジャンプしてのぼることはできません。10階にのぼるためには、まず目の前の階段を一段、一段のぼっていくしかありません。マナビバの利用者の方は、いきなり高い目標を達成しようとして、失敗の経験をしてきた方が多いようです。

マナビバでは、最終の目標と当面の目標を一人一人と確かめながら、利用者の最初の一歩のお手伝いをさせていただきます。まずは、マナビバの見学から始めてみませんか。

文責：阪井　茂

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちで皮算用していることを語っていくよ。

６月の大阪府連の活動者合宿で、井手栄策先生の講演「みんながみんなのために～頼り合える社会をめざして～」を聴いた。それによると、今の日本の社会システムを根本的に変革するには、「日本社会の超高齢化や少子化の問題は経済成長や自己責任論では解決できない」という発想の転換が必要らしい。既得権をなくし全員に暮らしの安心を保障する行政サービス（医療や教育、その他）を提供することが、結果的に格差を縮小し、成長を下支えし、財政を再建する、という井手先生の発想が必要だと私も思う。にもかかわらず、今の政治が経済成長を求め続けているのは残念だ。今、公営住宅の自治は超高齢化を迎えて日々の運営・活動がままならない。自治も高齢者福祉も教育も子育ても多文化共生も、地域のまちづくりの一環として「みんながみんなのために」の仕組みを考えてみたい。　（寺本良弘）

いい湯かげん

運動が行政政策になったという逸話

特別区か総合区かという行政機構の議論の下地として欠かせないのが、流入者が多い「母都市」大阪市の労働行政のあり方議論だが、法政大学の筒井美紀准教授が面白い論稿を発表されている。「大阪府における地域雇用政策の生成に関する歴史的文脈の分析・就労困難者支援への体系に関する総評労働運動の影響-」という難しそうなタイトルだ。要は「労働運動が労働行政になった」という話だ。

いまトレンディな生活困窮者へ就労支援政策の原型となったのが「大阪型地域雇用政策」だ。その内容は、一つに、雇用政策がまだ地方自治体のテーマではなかった1990年代に、大阪府が「労働行政地域総合システム」を発案し、商工労働部に「雇用推進室」を設置したこと。二つに、これに続いて大阪府が「地域就労支援事業」を発案、さらに「行政の福祉化」という理念から委託物件契約に「総合評価入札制度」を導入したこと。三つに、国が無料職業紹介事業を認可（2003年）すると、豊中市がいち早くこれを活用し、「豊中モデル」と称される就労支援に取り組んだことだ。

この「大阪型雇用政策」も一朝一夕になったはずがないと、筒井准教授は、元大阪府職員の橋本芳章さんや元豊中市職員の西岡正次さん、元部落解放同盟役員のボクと、Ａワーク創造館館長の高見一夫さんの聞き取りを行った。その取材方法はちょっと変わっていて、ボクの場合、所属する西成支部が「同和対策事業のオルタナティブ」に取り組んでいたことや、その昔、ボクが故上田卓三代議士の秘書もやっていたことにまで言及し、四人がほぼ同年代で、1970年代の大阪総評を中心にした労働運動と部落解放運動の共闘の時代を経験していたことに着目している。そして、四人がそのフィールドワークにおいて、「異質な他者との出会いという、情念を揺さぶられる体験」を伴っていたがゆえに、既存の制度や事業の射程と限界とが見えたのだろうと分析している。

1970年代、部落解放運動との共闘を始めた大阪総評労働運動は、組合員にはなっていない都市労働者と出会い、部落解放運動もまた、障害者等の都市生活者と出会い、その悩みや願いが既存の制度や事業を超越したものであることに気づき、葛藤する。残念ながら（と言おうか）労働運動の方はそれを進取する暇もなく連合結成へと向かったが、大阪府や基礎自治体がその財産を進取した。つまり、光栄なことに、筒井准教授は、労働運動や解放運動の試みが「自治体政策になった」と評価してくれている。

ボクは、大都市においては「地域」だけでは括れない「流域」とでも表現すべき都市空間があると言ってきたが、その「流域」にかつて大阪総評が立ち合い、はたまた「地域の重層性」に部落解放運動が立ち入ったのだと思う。

㈱ナイス代表取締役
冨田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

[若松司] 夏祭りの喧騒のなかにいると、どこに身を置いていいかわからなくなって逃げ出したくなる。小さい頃の楽しい思い出がないからかな。
面倒くさい 性分だって わかってる

[山村裕太] 最近イベントなどで司会をさせていただくことが多い。早口なテンションの高い司会は得意だが、ゆっくり話す真面目な司会はよくかむ。不思議。

地域の縁を心でつなぐ

奥様を突然亡くされたご主人と初めてお参りしたときの話です。

「ご主人、何かお尋ねはないですか？」「何を聞いて良いかも分かりません。住職さん、家内にお経を届けてやって下さい」。お参りをする方にとっては当然の、この真剣な依頼の重さに、一瞬、答えに窮しました。が、「今から心を込めてお勤めさせて頂きます」と言葉を継ぎました。お勤めが終わり、「ただ今、お勤めさせて頂きましたが、ご主人さんの心にお経は届きましたか？」「はい」「安心しました。ご主人の心に届かないお経が、奥様に届くはずがありません。ご主人の心にお経が届くならば、必ず奥様に届いています。ご主人が、このお参りの時間を大切にすることが、一番大切なことと思います」とお伝えしました。

亡き人へのお参りは、私たちが行ったことのない遠い世界に向けたお勤めではなく、今、「私」の心の中に生き続けている亡き人を感じる時間なのです。だからお参りすると亡き人と会えるのです。仏様と出会い「ありがとう」と手を合わせたいものです。

松向寺　通法

COUNT 2.99

隣保館などで事業を行う中で感じたことをつぶやいて、西成のまちづくりに役立てていきます！

なび編集長 寺嶋公典

エンディングノートに感謝？

少し前に、「足が痛い」とか「しんどい」と言う母親のことが心配になったのでエンディングノートを勧めてみた。そんなことはつい忘れていたある日、母親が「まだ途中やけど」とノートを渡してきた。ノートには丁寧に「亡くなった時に知らせてほしい人」や「自宅で最期を迎えたい」、好きな場所は「自然が残っているところ」などと書かれており、母親の考えが再認識できたことはとてもよかった。ただ、行ってみたいところが「石垣島」とあった。すぐに、数年前、母親の弟の元嫁がいる石垣島に行ったとき、結局のところ母親は行かなかったことを思い出した。せっかくなので、「じゃあ、石垣島に行こうか！」と誘うと、「足が痛いから治ってから」。いや、きっと治らないので（笑）、「何かあっても車いす借りれるし、大丈夫やから１０月に行こうか！」と返すと、「１０月はアカン」（笑）。でも、エンディングノートのおかげで、親孝行ができそう？

ゆ〜とあい
にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ〜とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび 8月号（vol.126）
発行日：2017年 8月 1日（創刊日：2007年 1月 1日）
発行：株式会社ナイス
発行人：代表取締役 冨田一幸
住所：大阪市西成区長橋 3-6-33
電話：06-6563-1156
E-mail:info@nice.ne.jp
url:http://www.nice.ne.jp/

編集長：寺嶋公典
編集：飯島照喜、沖田一志、佐々木敏明、田岡秀朋、西田吉志、安田拓也、山村裕太、若松司（あいうえお順）
イラスト：hidarimaki　デザイン：谷口円

facebook
facebook：https://www.facebook.com/navi.nishinari/